



広島女子殺害事件 差し戻し控訴審 父は「死刑判決を望む気持ちは変わらない」

2010.4.7 23:42

広島市安芸区で平成17年、小学1年の木下あいりちゃん＝当時(7)＝が殺害された事件で、殺人や強制わいせつ致死などの罪に問われたペルー人、ホセ・マヌエル・トレス・ヤギ被告(38)の差し戻し控訴審が8日、広島高裁で始まる。あいりちゃんの父親で自衛官の建一さん(43)は「死刑判決を望む気持ちは変わらない。ヤギ被告は謝罪の気持ちがあるなら裁判で真実を話してほしい」と訴える。

「公判のたびに事件のことを思いださなくてはならない」

異例の展開をたどり、長期化する裁判に建一さんはつらい心情をのぞかせる。

今年1月、建一さんは国際緊急援助隊として、地震で被害を受けたハイチ共和国に派遣された。「現地に着いた最初の夜、あいりが弟と2人で出勤する私を見送ってくれる夢を見た」という。「笑顔で、本当に生きているように鮮明だった。夢から覚めた後、あいりはもういないという現実が伝わった」

あいりちゃんは、平成16年に起きたインドネシア・スマトラ島沖地震の被害者に自分の小遣いを送った。「きっと『お父さん、がんばってね。たくさんの人を助けてあげてね』と言いに来てくれたんでしょうね」。帰国までの間、ずっと愛娘を身近に感じながら任務にあたった。

これまでの裁判で、ヤギ被告は遺族の供述調書の朗読に涙を浮かべたり、被告人質問では遺族に向けて「心からごめんなさい。すみません」と日本語で謝罪の言葉を述べたりした。一方で、動機などを明確に語らず、事件の詳細部分はあいまいなままだ。

建一さんは「真実を話さない限り、ヤギ被告が口にしてきた謝罪は決して受け入れられない」と語気を強める。「なぜ被害者があいりでなければならなかったのか。どのように死んだのか。最後に何か言い残したことはあるのか。その空白を埋めたい」

建一さんは、意見陳述が認められれば、ヤギ被告に対して改めて真実を話すよう呼びかけるつもりだ。

「あいりに『ヤギ被告がようやく心から謝る気持ちになって真実を語ったよ』と言えるような裁判になることを願っています」